

# 木村泰賢全集

木村泰賢著

一般仏教に関する教養書で、本宗の僧侶におすすめた  
いものとして、ここにとりあげてみたのが、「木村泰賢全  
集」（全六巻昭和四十二年十二月以降大法輪閣より刊行）  
である。

木村博士は、高楠順次郎博士の後をうけて東京大学教授  
として印度哲学を担当、昭和五年五月、在職中に五十才の  
若さでおしくもなくなられた。その没後に、博士の著書や  
論文が上記の全集としてまとめられて明治書院から出版さ  
れ、当時はひろく読まれたものであったが、その後、長い  
間絶版となっていたのが、このたび復刊されたわけであ  
る。

今の私たちの年代のものにとっては、博士は遠い昔の人  
であって、その偉大さはたと想像する外ないが、親しく接  
した人たちの話によると、木村博士という方は、書いても  
話をされても、実に達意的で読者、聴者を深く魅了したそ  
うである。つまり学者でありながら、学者を越えた幅広さ

があり、むしろ学者臭を脱した人間の魅力があったらし  
い。この全集を通読してみても、たしかにそうで、難解な  
インド哲学やインド仏教をじつにうまくとめている。専  
門的研究でありながら入門書の役割も果している。恐らく  
学問的価値の外にこういう点も考慮して、今日復刊された  
ものであろう。

戦後は仏教学者も判りやすい文章を書くようになったが  
戦前のわが国の学者は難波な文章を書く人が多く、その最  
たるものが仏教学者であった。それは何となく判りにくい  
表現をした方が思想が深遠に見えると思われていたところ  
に、難解な仏教用語を読者への考慮なしに使うので、一そ  
うその感を強くしたのでだろうと思う。ところが、この時代  
において博士はすでに、専門的研究でもそれを大衆に判り  
やすくということをつねに念頭において書いていられる。  
ある門下の人からうかがったことであるが、博士はよく講  
談本を読んでいられたそうであるが、その理由をたずねる  
と、文章を練るためだと答えられたそうである。

さて全集六巻は博士の雄大な構想をそのままに表現する  
もので「第一巻・印度哲学宗教史」は仏教以前のバラモン  
教の思想史の流れを、「第二巻・印度六派哲学」は、その

後に派生したバラモン教系の哲学諸派の受説を概説したものである。この二巻によって仏教以外のインド思想をまとめたので、次に仏教に移り、歴史的發達の順序にしたがって、「第三巻・原始仏教思想論」・「第四巻阿毘達磨論の研究」・「第五巻・小乗仏教思想論」・「第六巻・大乘仏教思想論」というようにまとめてある。これでインド哲学思想のほぼ全体をつくすのであるから、その精力的な仕事ぶりに驚かざるを得ない。もっとも今から四十年以上も昔の著作であるから、その後において研究が長足の進歩をとげていることは事実であるが、しかしこれは博士の研究が過去のものになったというのではなく、むしろ博士の研究が土台となってそれが一そう精密化されて、今日の学問が發展しているのである。おそらくこのような意味からと思うが、各巻とも今日の学界でもっとも權威のある学者の解説を付し、参考すべき研究文献を詳しくあげている。

六巻を通読することは容易でなく、人によってはその必要もないと思うので、私は、この中でとくに「第六巻・大乘仏教思想論」と「第三巻・原始仏教思想論」をおすすめしたい。じつは博士は大乘仏教研究の中途の段階においてなくなられたのであって、この意味で第六巻は未完成のものであるが、専門的な精密な研究に入る以前において、博

士は仏教思想の普及と啓蒙のために「解脱への道」・「真空から妙有へ」などの著作をあらわしておられた。それはじつに生き生きとした文章であつて、おのずから博士の体験や人生観がにじみ出ているものである。たとえば「無限生命への憧憬、これ宗教である」というようなテーマがあるが、宗教についての難しい学術的定義などよりもはるかに味い深い言葉である。第六巻はじつは、こうした博士の啓蒙的な著作や論文を集めて編纂し直したものであつて、われ／＼僧侶にとつて、もっとも役に立つのは、この「大乘仏教思想論」であろう。この中には法華経に関する論文も収められている。

「原始仏教思想論」は、大正十一年に一冊の本として公刊されたもので博士の四十一・二才の頃であろうか。原始仏教に関する著作は今日ももっとも多く出版されているが、おそらく内容の豊さにおいて本書の右に出るものは少いであろう。哲理・心理・倫理と多方面から包括的に説きながら、叙述が生き／＼として少しもあきさせない。最近の原始仏教思想論は、とかく現代人の頭からブツダ釈尊の思想を合理化して割り切ったようなものが多く、何となしに抽象的に感ぜられるのに対して、博士の学説が具体性にとんでいるのは、仏教の心理分析や徳目を生かして解釈し

ているからであろう。

ところで、ここにつけ加えたいことは、面白いことに、この原始仏教思想論に対して、倫理学者の和辻哲郎博士が痛烈な批評を加えて「原始仏教の実践哲学」という著作をあらわしたことである。批評は主として縁起（十二支縁起）の解釈をめぐるものであった。これに対する木村博士の反論は上記の著作の附録に収録されている。ほかの学者も加って当時はなばなし論争が展開されたということである。和辻博士は前記の書で、公然と木村博士の学説に對立するものとして、宇井伯寿博士の学説を称揚し、自分は宇井氏に示唆をうけあるいはその指導によって研究を進めたと述べている。それで、宇井・和辻博士が手を結んで木村博士と對立するような形になった。しかし木村・宇井両氏は同じ宗門（曹洞宗）に属する同級生で、ともに高楠門下の双壁ともいうべき秀才であって、木村博士がなくなつた後、宇井博士が東北大学から東京大学に移って講座をもたれたのである。だが、二人は親友であつてもたしかに学風は対照的に異つたところがあり、木村博士が達意的であるのに対して、宇井博士の研究は実に緻密であつて、しかも初学者を顧慮しない生硬な文章をめん／＼とつゞら

た。それはともかくとして、和辻氏は宇井博士の方法論を發展させて、文献批判を厳密にし、思想の論理的解釈を徹底されたのである。このためもあつて木村氏の研究は少しあまいな所があるといわれるようになったらしい。そして宇井氏の時代になるとその精密な学風が一世を風靡するようになった。

宇井博士の不巧の名作、印度哲学研究（全六卷）は、とくに原始仏教の部分は、木村説の批判を念頭においているという人もあり、そのように思つて読んで見るとそう思われるふしもないではない。ともかく私の学生時代は宇井説が大きな權威をもつていた。しかし、わずかでも自分の経験を積んでみると、木村説にも非常に捨て難いものがあるように思われて来たのである。第一、文献批判をいかに厳密にしても、批判の目が現代人の目と同じであれば、それは現代人の考えであつて、原始仏教と本質的に関係ないといふべきである。むしろ文献のとり扱いよりは、原始仏教の思想的雰囲気を再現、体験することの方が重要であるまいか。和辻氏のいわゆる論理的解釈にしても、ブツダ釈尊は宗教家でこそあれ決して論理的な哲学者ではないのであるから、大いに問題であろう。和辻氏は、縁起は、存在についての合理的な論理の展開を表現したものであつて、業

とか輪廻などの不合理なものはこの思想の中には本来含まれていないとして両者を峻別し、両方を一語にして説明している木村氏の縁起の解釈を誤ったものとして、きびしく批判する。しかし公平に原始経典を読んで見れば、縁起が業の理論を述べたものであることはどうしても否定し得ないようである。そして業の理論であれば、当時の思想状況からして当然に輪廻と結びつく。むしろ輪廻や業などの不合理なものを含むところに、宗教としての原始仏教の生命があるのであるまいか。

余分な私見を加えて汗顔の至りであるが、木村博士の学説は今日再評価さるべきであるということ強調して、拙文を結びたい。(大法輪閣刊)

勝 呂 信 静

## 社会科学と現代仏教

孝 橋 正 一 著

△仏教▽は△近代▽のもつ問題性の総体のなかに投げつけられ、そこを通過することができなかつた。それは歴史

の宿命として甘受せねばならないであろうが、しかし今後も△仏教▽に対する△近代▽からの問いかけはつゞいていくであろうし、それに応えられないかぎり時代から葬り去られていく以外にみちはない。

しかも新たな問題状況として△近代の自己否定▽という難問をひきうけねばならないのである。現代におけるこの二重の問題状況をとらえることができないならば、△仏教▽からの未来に対する発言はもちろんのこと、今日的な問題への解答を生みだすこともできない。残念ながら教団仏教を含むその周辺の△仏教▽の現状は、現代に迫る手だてをもちあわせていないようである。思想的な作業においても、幻の古典的△近代▽との格闘に精魂をかたむけている場合もあるし、△近代の自己否定▽という状況認識をあまり、中世的△非合理▽主義に自己を埋没させてしまう場合もある。一般に△近代▽否定の媒介的な役割としての△中世▽への問題関心は極めて強いが、それは少なくとも△中世▽への埋没を意味しないし、中世仏教イデオロギーの擁護とも連なるものではない。また一方には日本的パーソナリティともいうべきヨーロッパ学信仰があり、△近代主義▽の無媒介的受容とその正当化意識を生みだしている。現代仏教に即していえば、それは△近代化▽認識